



エフィラ愛川ふれあいの村 今月の風景

2026 年 8 月 自然のたより

2026 年の夏は、記録的な暑さに見舞われました。8 月上旬の時点で全国 34 地点で最高気温が 40℃以上となり、過去最多となっています。気象庁は今年から、最高気温 40℃以上の日を「酷暑日」と名付けました。ここ愛川でも厳しい暑さが続き、この夏の最高気温は 36℃を記録しました。一方で、前線や湿った空気の影響で涼しい日があったり、例年よりも早いペースで台風が発生したりと、天候の変化が激しい夏でもありました。そんな落ち着いた季節の中でも、村の生き物たちは、それぞれの場所で懸命に夏を生きています。（後藤）



ウバユリと空蟬



国蝶オオムラサキ



子猿でござる



メマツヨイグサ



ミョウガ



オトギリソウ



マメ科のエンジュ



ハサミツノカメムシ



マユミにキバラヘリカメムシ



特定外来種アカボシゴマダラ



コクワガタ



ヤマガラ



仲良しキジバト夫婦



旅の途中イカルチドリ



キセキレイ

トピックス ★セミの声★

「閑さや岩にしみ入る蝉の声」——松尾芭蕉の有名な一句です。この句に詠まれているセミは、ニイニイゼミだといわれています。ニイニイゼミは初夏から鳴き始めるセミで、その声は夏の訪れを感じさせてくれます。夏本番を迎えるとクマゼミやアブラゼミが鳴き始め、ツクツクボウシの声が聞こえる頃には、少しずつ夏の終わりを感ずるようになります。セミは種類によって鳴く時間帯も異なります。明け方や夕方に鳴くヒグラシ、日中に鳴くミンミンゼミなど、それぞれの声を聞き分けることで、季節だけでなく一日の時間の流れも感じることができます。セミは古くから「夏の虫」として親しまれ、私たちに季節の移り変わりを知らせてくれました。

多くのセミは気温が25度を超えると鳴き始め、35度を超えるような暑さになると、鳴くのをやめて日陰で休むといわれています。近年では、地球温暖化の影響によって、セミが鳴き始める時期や時間帯にも変化が見られるそうです。人間だけでなくセミにとっても厳しい暑さが続いているのかもしれない。

また、これまで生息していなかった地域でもクマゼミが見られるようになるなど、気温の上昇や人の移動などに伴って、生き物の生息範囲にも変化が起きています。生息範囲の拡大や個体数の増加は、うれしく感じる一方で、もともとその地域に生息していた生き物との関係が変わり、生態系に影響を与える可能性もあります。そして、その変化は私たちの生活と無関係ではありません。

今、耳を澄ませばさまざまなセミの声が聞こえてきます。その声をただ「夏の風物詩」として楽しむだけでなく、季節の変化や自然環境の変化にも目を向けてみてはいかがでしょうか。そして、これからも長くセミの声を楽しむために、私たち一人ひとりが自然環境について考え、行動していくことが大切です。(袖山)



生き物 ★木と仲良しのキノコ★

夏から秋にかけてのこの時期はキノコが観察しやすい時期。雨の日の翌日など地面が湿ったあとには、あちこちから様々なキノコが地上に顔を出しています。

キノコ探しのコツとして、ブナなどどんぐりのなる木やカバノキの仲間、マツの仲間といった木の周りを探すとよいです。それぞれ仲のいいキノコがいて、よく近くに生えているのです。

これらの木と仲の良いキノコは、地下で木の根と繋がることで木と助け合って生きています。木が光合成で作った栄養を分けてもらう代わりに、木が自分で吸収できない養分を吸収しやすい形につくり変えて与えるのです。

村では、ヒマラヤスギの近くでベニタケの仲間がよく見られます。彼らも、助け合う木とキノコの組み合わせの一例です。(中島)



旬 ★夏の蜆(シジミ)★

シジミは一年を通して購入することが出来ますが旬は夏と冬の2回あります。7月下旬から8月のシジミは「土用シジミ」といって、産卵前で身がふっくらしていて旨みが強く、夏の体調管理や夏バテ予防に良いとされています。もう一つの旬は1月から3月頃です。この時期のシジミは、「寒シジミ」といって、冬を越すため栄養を蓄え、身が引き締まり、コクがあるのが特徴です。シジミの産地は島根県の宍道湖や青森県の十三湖などが有名です。相模川水系の河川でも商業的なシジミ漁はやっていないようですが、シジミは捕れているようです。もう何十年も前になりますが、子どもの頃、故郷の川で、川底を足で探ってシジミを捕った思い出があります。あの川は今どうなっているでしょう。遠い昔の思い出です。(高梨)



秋の夜の思い出となる。エンマコオロギ(写真下)は、褐色で大型、羽の光りに艶があり、顔の模様が怒った閻魔さまに似ているのが名の由来。雄の背中にある複雑な模様は「キリキリ」「コロコロリー」と美しい声で鳴き雌を呼び寄せ、縄張りを宣言するためのものである。遅い時間に帰る時の虫の声は疲れを忘れさせます。昆虫類の生息環境を心の片隅にも残したいと思う。(吉田)

来月の見どころ
秋になり昼間から鳴く虫は、セミ類をはじめヤブキリ(写真上)や騒がしく鳴くアオマツムシなどがある。アオマツムシはほかの虫と違って樹上からシャワーのように煩く聞こえてくる。垣根などで静かに、「チンチン」と鉦(かね)を叩くように鳴くカネタタキは可愛らしく暑さを忘れ何か風情を感じる。
夜になると、エンマコオロギ、マツムシ、スズムシ、ウマオイなど多くの虫が思いのままに鳴き秋の夜を楽しませてくれる。特に生息地が少なくなっている「チンチロリン」と鳴くマツムシは秋の夜の思い出となる。